

きょうはな (あんとうせんう)  
京の花 (安藤残雨)

はな  
花ざかりに京をみやりてよめる (素性法師)

短歌 見わたせば柳さくらを こきまぜて

みやこ  
都ぞはるのにしきなりけり

かね  
鐘音は 黒谷か 知恩院か

はな  
花に 明け 花に 暮るる 旧都の 春

あらしやま  
嵐山 御室 又 清水

ゆうし  
遊子 酔吟 杖を 引いて 巡る

短歌作者 古今集の歌人。俗名を良岑玄利といって、清和天皇の御代に左近将監となった。のちに出家して権律師となった。三十六歌仙の一人。

解説 平安京の春の風景を捉えた名歌。

語釈 ※見わたせば＝遠くみやること。※柳さくらを＝柳は当時朱雀大路に、街路樹のように植えられていた。柳も桜も当時の人々に愛好された植物である。※にしきなりける＝柳と桜が入り交じった美しさを春の錦と言った。

通釈 遠く見渡すと、柳の緑と桜の白い色が入り交じって都こそ春の錦であるなあと。

京の花

解説 京都に咲く花の風情を詠じたもの。

語釈 ※黒谷＝比叡山西塔の北谷。法然が学び浄土教開創の糸口をつかんだ青竜寺がある。※知恩院＝浄土宗総本山。※旧都＝昔の都。京都のこと。※嵐山＝桜紅葉の名所。※御室＝宇多天皇が建立し、退位後その御所とした。仁和寺の別名。※清水＝清水寺。※遊子＝旅人。※酔吟＝酔って詩や歌を口ずさむこと。

通釈 鐘の音色は黒谷か知恩院か。京都の春は花に明け花に暮れる。嵐山、御室、そして清水寺も一面の花。旅人は詩や歌を口ずさみながら杖を引いて花の京都を巡るのである。